

歴博 くらしの植物苑だより
第99回くらしの植物苑観察会 6月23日(土)
シーボルトとくらしの植物苑
辻 誠一郎(東京大学)

オランダの国立ライデン大学附属植物園には、江戸時代後期、シーボルトが日本からオランダに持ち帰った13種15本の日本の樹木が今も生き続けています。「シーボルト植物」または「シーボルト・ツリー」と呼ばれています。これらのうちのほぼ半数の6種が、実は国立歴史民俗博物館のくらしの植物苑に「シーボルトツ・チルドレン」として生き続けているのです。ツタ、フジ、オニグルミ、ケヤキ、イロハモミジ、アケビの6種です。正確に言うと、これら6種は、ライデン大学附属植物園の大木・老樹の枝や若芽を挿し木や接木で育てた分身たちなのです。2002年2月、はるか遠くのオランダから飛行機に乗ってこれらは成田に降り立ったのでした。

そんなに貴重な「シーボルト植物」の分身がどうしてこのくらしの植物苑に居るのでしょうか。それはライデンでの朝顔展に端を発します。2000年の夏、ライデン大学附属植物園では、およそ1ヶ月という異常に長い期間にわたって「日本の伝統朝顔展」が開催されました。江戸時代に作り出された変化朝顔がヨーロッパで初めて紹介されたのです。この特別展示は、ライデン大学附属植物園と、国立歴史民俗博物館の共催でした。その前年の1999年の夏、国立歴史民俗博物館くらしの植物苑では、日本でもほとんど開かれたことがなかった変化朝顔の特別展示を初めて開催したのです。これには九州大学の似田坂英二先生のところで保管されていた貴重な種子の提供がありました。初めての大胆な試みでしたが、展示は好評を博しました。その翌年の2000年は、日本とオランダが友好関係をもってから400周年の記念すべき年でした。その記念に、今度はオランダで「江戸を咲かそう」ということになったのです。日本よりはるかに緯度が高いオランダで変化朝顔の展示をやるというのですから、今から思えばとても大胆で危険なことだったのです。幸いにして似田坂先生や山中達生さんに助けられ、ついにオランダでも見事な変化朝顔が咲いたのでした。遠回りの話ですが、その日本オランダ友好400周年の記念事業である「日本の伝統朝顔展」を記念して、その1年半後に「シーボルト植物」がライデン大学附属植物園から贈られたのです。

シーボルトは、オランダに帰国してからぼう大な日本で採取された植物標本やボタニカル・アート、それに自身が書き溜めた日本の民俗植物の記録を整理し、「フローラ・ヤポニカ」という日本植物の図譜を刊行しました。この図譜はとてもきれいで、高価だったとはいえ、絶賛を博したと言われていました。これによって日本の植物が世界に知られることになり、園芸植物としても貴重で珍しい植物が注目されるようになったのです。この図譜の大きな特徴は、シーボルトによって記された民俗植物の記事が盛り込まれていることでした。さすがに医者らしく、薬用はもちろん、さまざまな用途についても日本での観察が散りばめられていたのです。「くらしの植物」といってもよい日本人の植物とのかかわりが記されていたわけです。シーボルトとは「シーボルト植物」でつながりをもったこのくらしの植物苑は、実はシーボルトの民俗植物学の延長線上にあると言えるのかも知れません。



2002年2月9日オランダ・ライデン大学から到着した苗 オニグルミは植物検疫所に1年間留め置きです。



第49回くらしの植物苑観察会「シーボルト・チルドレンの紹介」カーラ・テーネ
「花と木の文化史」故佐原真（国立歴史民俗博物館名誉教授：当時）



セレモニー当日の苗



秋の紅葉（鉢植状況）

次回予告 ○第100回くらしの植物苑観察会

2007年7月28日（土）くらしの植物苑観察会100回記念「市民のためのくらしの植物苑」
辻 誠一郎（東京大学新領域創世科学研究科）

13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料